

日本心理学会第82回大会 公募シンポジウム
宗教心理学的研究の展開（15）－宗教心理学的研究の最前線－

「破壊的カルト」 研究の動向

立正大学大学院 心理学研究科
木村 真利子

本発表の流れ

- 破壊的カルトとは何か
- 破壊的カルト研究
- マインド・コントロールに関する研究
- 個人要因（カルトへの入りやすさ）に関する研究
- 今後の展開

「破壊的カルト」とは

● 「カルト」 3種の用法 (Melton,1992)

- ① 宗教集団類型の1つ (宗教社会学)
- ② 異端 (保守的キリスト教徒)
- ③ 反社会的団体 (脱会者、家族、メディア)

ある集団と社会との葛藤を契機として、問題性・違法性の高い集団を指して用いられ始める

 “破壊的” カルト

※宗教とは限らない (Hassan, 1988)

宗教カルト、政治カルト、教育カルト、商業カルト

どこが「破壊的」か？

●破壊的カルトをめぐる社会問題（藤田, 2008）

- ①生命の破断
- ②性的虐待
- ③暴力的布教
- ④児童虐待
- ⑤金銭収奪
- ⑥正体隠しの詐欺的布教

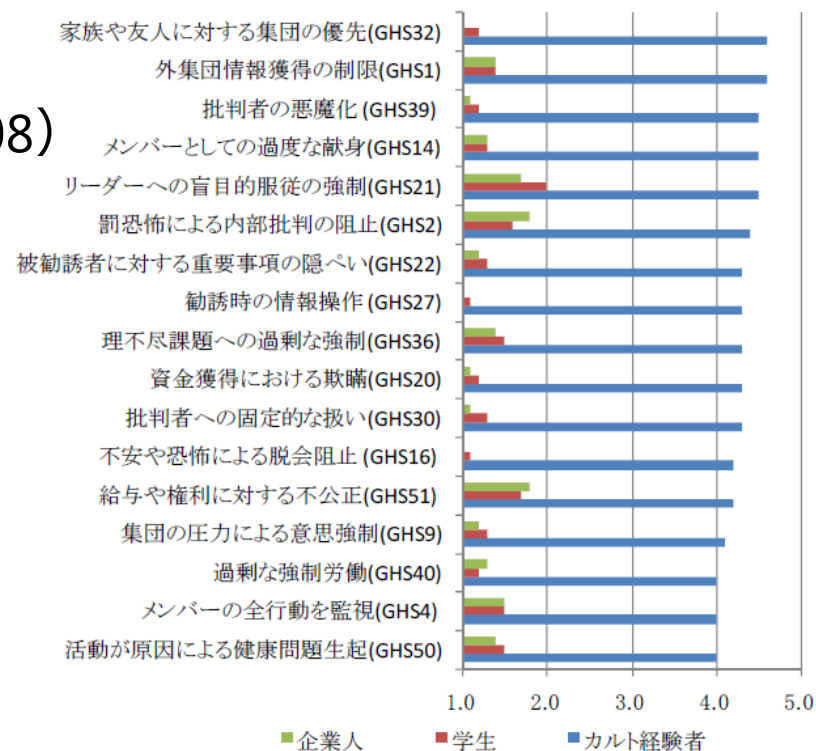
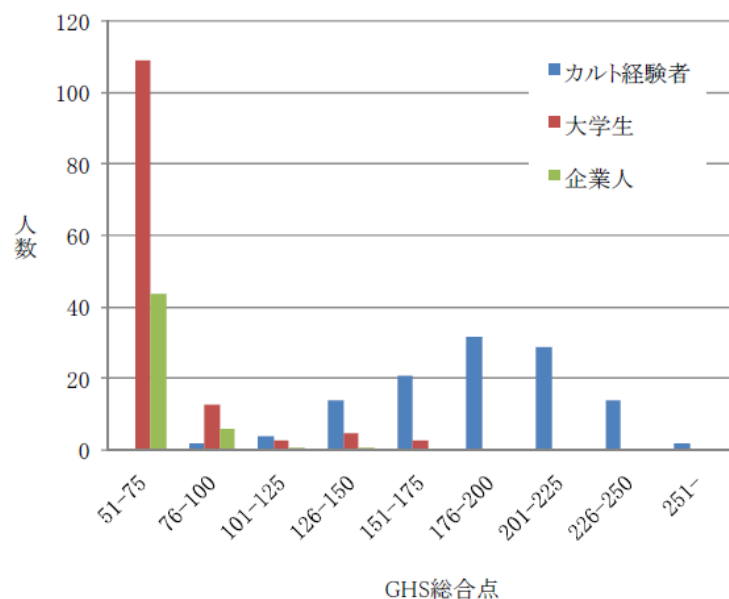
●心理操作の問題

どこからが破壊的カルトか？

● 集団健康度を測定する尺度

- Group Psychological Abuse (Chambers, etal. 1994)
- Individual Cult Experience Index (Winocur, etal. 1997)
- Across Groups Psychological Abuse and Control Scale (Wolfson, 2002)

– 集団健康尺度：GHS（西田ら, 2008）



破壊的カルト研究

- マインド・コントロール、心理操作
- 被害と治療法
- 予防教育
- カルト論争、MC論争
- 入会者の家族
- 子ども、2世に関わる問題
- 女性に関わる問題
- カルトに対する脆弱性
- 政策、司法に関わる問題
- 事例報告・体験報告

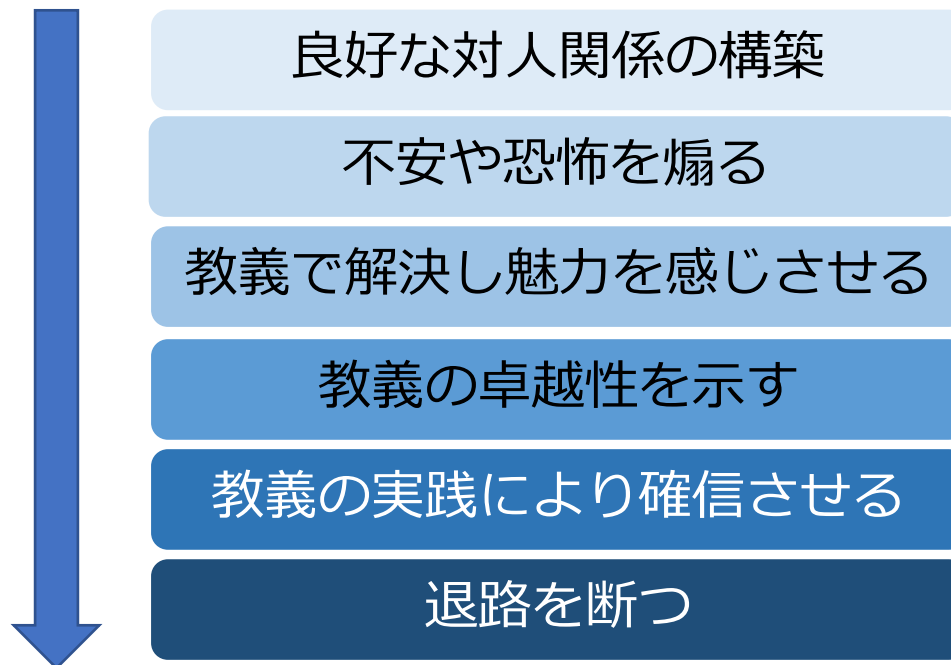
etc.



- ◆International Journal of Cultic Studies(2010~2018)
- ◆Cultic Studies Review (2002~2010)
- ◆Cultic Studies Journal (1984~2001)

マインド・コントロール_(以下、MC)

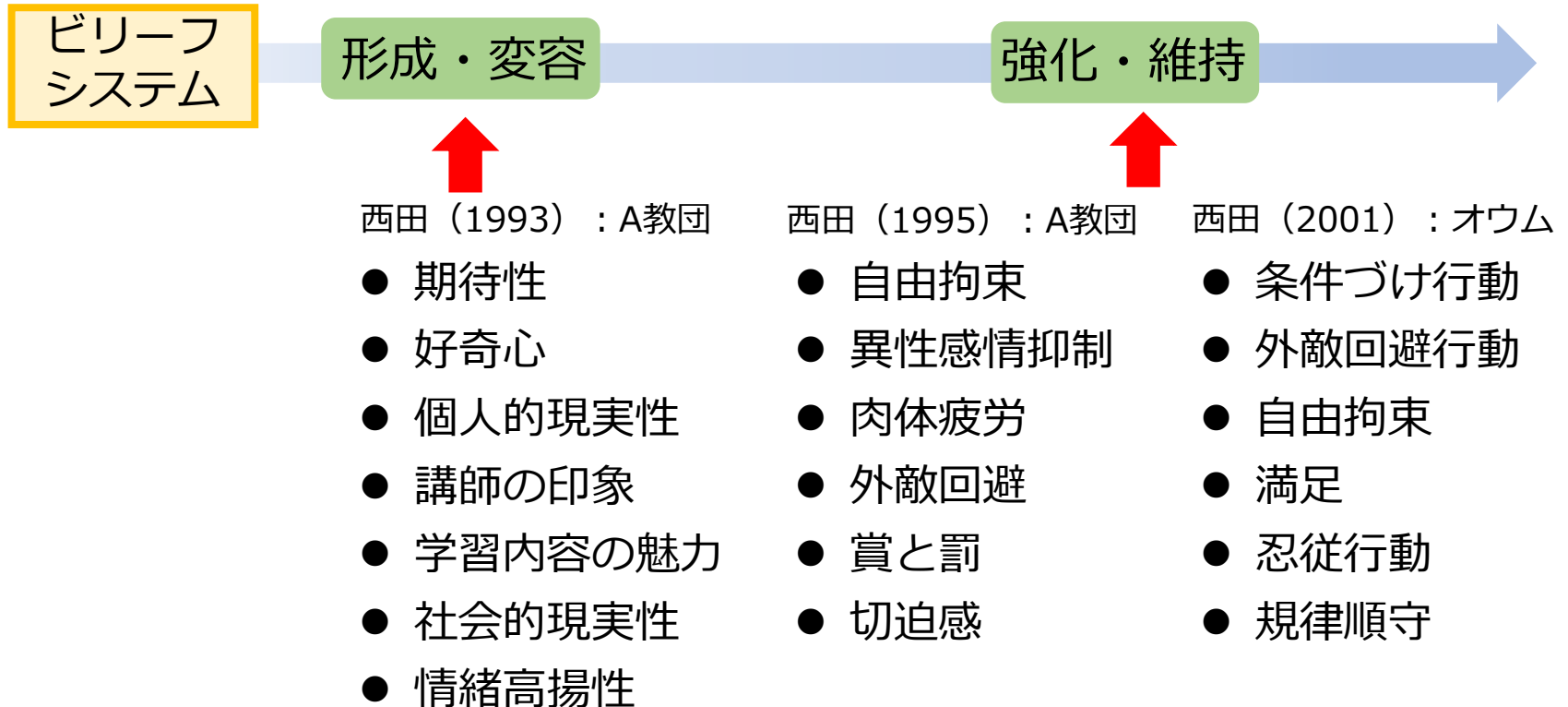
「他者が自らの組織の目的成就のため、
本人が他者から影響を受けていることを知覚しない
あいだに、一時的あるいは永続的に、個人の精神過程
(認知、感情) や行動に影響を及ぼし操作すること」
(西田, 1995)



西田 (2008) は、
MCのプロセスを
左記の6手順にまとめ
ている

西田（1993,1995,2001）

MCで使用する心理学的技術を明らかにし、それらによってメンバーのBSが形成・変容、強化・維持されていたことを示した



木村（2017a） -1

1. 6手順によるMC（西田, 2008）がメンバーのBSに与える影響について、対象団体を広げて検証
2. 非カルト団体との比較によって、MCはカルト特有の勧誘手法といえるか検討

良好な対人関係の構築

不安や恐怖を煽る

教義で解決し魅力を感じさせる

教義の卓越性を示す

教義の実践により確信させる

退路を断つ

（西田, 2008）

対象者

議論ある8団体 114名

議論のないキリスト教団体 65名

設問（面接調査に基づき作成）

①BSの形成・変容、②BSの強化・維持、③MCの技術

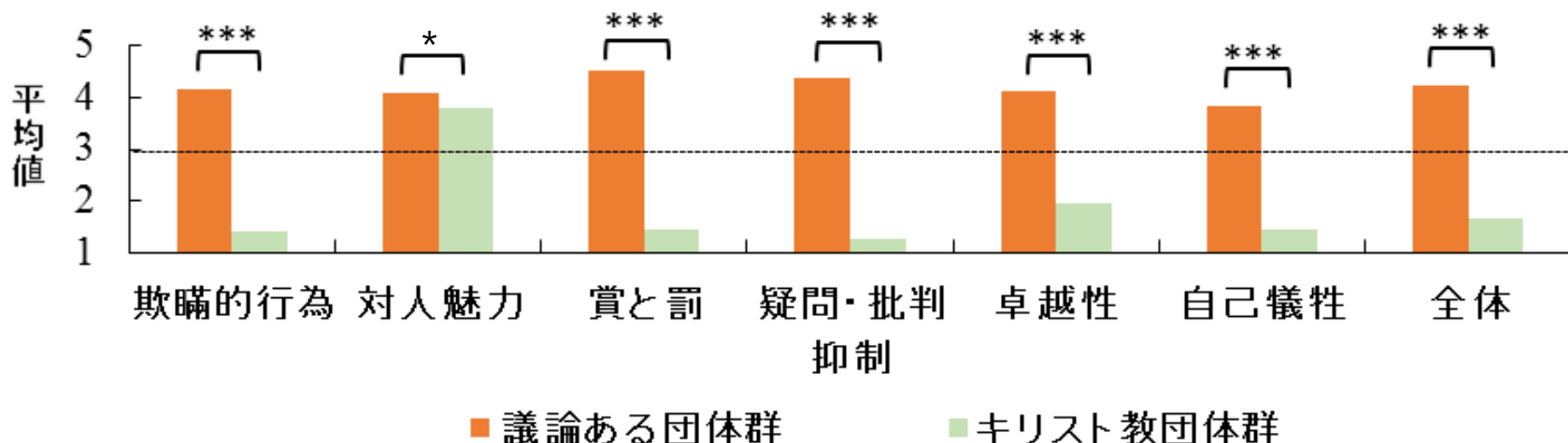
木村（2017a） -2

●MCの技術は議論ある団体で特有にみられる

- － 因子分析の結果 6 因子を抽出（主因子法、プロマックス回転）
- － キリスト教団体群は「対人魅力」以外で値が非常に低く、全ての因子で議論ある団体群との間に有意差

※MCは心理操作技術の組み合わせの総称（西田, 2001）

1 要素の確認のみからMCとは言えない



<資料> MCの技術 因子分析結果

議論ある団体

項目内容	因子負荷量						平均値
	1	2	3	4	5	6	
＜第1因子：欺瞞的行為＞							
最初に組織と接触したとき，宗教団体であることがわからなかった	1.00	-.07	-.07	-.04	-.11	-.06	4.08
最初に組織と接触したとき，団体名を名乗られなかった	.90	-.01	-.05	-.16	-.12	-.09	4.17
恋愛関係や恋愛感情を持てはいけなかった	.76	-.22	.01	.06	-.06	.20	4.36
組織や信仰の為の嘘はよいこととされていた	.66	.19	.03	-.03	-.10	-.04	4.19
教祖や組織のトップがいかに自分たちの為に働いているか，苦労しているかを教えられた	.65	.10	-.20	.33	.03	-.14	4.60
親や周りの人とは距離を置いたり，組織のことを話さないようにと言われていた	.65	.08	.09	-.04	.00	-.11	4.08
教祖や組織のトップには最大の礼を尽くしていた(例：拍手を送り続ける，写真に頭を下げる など)	.55	.02	-.04	.11	.19	.15	4.31
伝道・勧誘の際には，積極的に活動してくれそうな人，才能や高い社会的地位をもつ人を優先して対応していた	.48	.28	-.07	-.20	.11	.16	3.66
伝道・勧誘の際には，相手に関する情報を他のメンバーに報告して共有した	.43	-.11	.05	.29	.34	-.01	4.49
伝道・勧誘の際には，相手の悩みや不安を聞き，それに合わせて対応を変えた	.40	-.07	.04	.23	.28	.14	4.47
献金や物品購入，物品販売などが滞ると，きつく迫られた	.39	.34	.04	-.01	-.16	.23	2.98

(続き)

項目内容	因子負荷量						平均値
	1	2	3	4	5	6	
＜第2因子：自己犠牲＞							
慢性的に睡眠不足だった	.07	.96	-.08	-.08	.17	-.06	4.16
活動は体力的にハードだった	-.07	.86	-.02	.05	-.12	-.01	4.27
空いた時間はほとんど組織の活動に費やした	-.05	.68	.08	.25	.25	-.16	4.38
活動資金や献金に切迫され経済的余裕がなかった	.33	.67	.03	-.25	-.04	-.02	3.78
毎日休まず活動して体調を崩した	-.05	.58	-.03	.16	-.12	.11	3.15
組織の活動のために仕事や学校をやめた, あるいは進学・就職をしなかった	.01	.46	.17	.15	-.12	-.16	3.53
仕事や学校の間も心の中で祈るなどの活動をつづけた	-.05	.44	.28	.08	.14	.00	4.17
入会にあたり, 財産を全て組織に寄付した	.32	.41	.16	-.08	-.21	.14	3.08
＜第3因子：賞と罰＞							
脱会すると地獄に落ちる, 悪いことがおこるなどと言われていた	-.02	.15	.69	-.02	-.03	-.05	4.56
悪い出来事は自分や悪魔のせいで, 良い出来事は組織の活動や神のおかげだと解釈されていた	-.03	.14	.68	-.11	-.04	.09	4.40
組織の教えに反したり, 活動をなまけると, 悪いことが起こる, 地獄に落ちるなどと言われた	-.11	.25	.65	.02	-.07	.05	4.22
組織に入らない人間には罰があたる, 地獄に行くなどと言われた	-.32	.23	.60	.06	-.07	.11	4.13
組織の教えに従うことによって, 問題が解決したり, よいものが得られるとされていた	.19	.14	.58	-.18	.04	-.10	4.63
組織の中にいればこの世や死後で幸福になれると言われていた	-.08	-.19	.56	-.02	.16	-.08	4.67
勧誘して組織に導くことはその人を救うこととされていた	.00	-.06	.55	-.01	.08	-.02	4.85
常識的に考えておかしいことや恥ずかしいこともやった	.17	.16	.54	-.04	.18	-.01	4.35
勧誘は最も神が喜ぶこと, 最も重要な活動などと言われた	.11	-.29	.52	.29	-.03	.04	4.66
勧誘の成果によって評価された	.22	.02	.51	.17	-.02	-.02	4.41

(続き)

項目内容	因子負荷量						平均値
	1	2	3	4	5	6	
＜第4因子：疑問・批判抑制＞							
組織に対して批判的な情報に触れることは禁止されていた	.08	-.06	-.09	.84	-.09	-.12	4.46
組織に対する疑問や不満を持つことは許されなかった	-.20	.11	-.09	.77	-.24	.14	4.42
組織に対する批判は、根拠のない迫害であると教えられた	.06	.19	-.02	.71	.13	-.05	4.50
組織への疑問が生じるのは、まだ活動が足りないから、あるいは成長していないからだと言われた	-.01	.11	.09	.62	-.08	.10	4.33
テレビや雑誌などの組織外の情報には触れる機会があまりなかった	.14	.21	.12	.41	.03	-.06	4.08
集会やイベントには毎回必ず出るよう言われていた	-.22	-.19	.29	.39	.01	.06	4.50
＜第5因子：対人魅力＞							
組織は居心地の良い雰囲気だった	-.05	-.01	-.01	-.06	.86	.04	4.04
組織のメンバーは親切で、自分のことを気持ちよく受け入れてくれた	-.03	-.17	.31	-.21	.85	-.05	4.36
組織のメンバーはとても魅力的な人たちだった	-.15	.33	-.31	-.01	.69	.16	4.24
組織の集まりやイベントは、気軽に参加できるような雰囲気だった	-.09	-.11	.11	-.05	.65	.06	
＜第6因子：卓越性＞							
周りの人がこれだけ真剣にやっているのだから、教えは本当だと思った	-.12	-.05	-.03	.10	.05	.83	4.29
周りがみんな信仰・活動しているので自分も自然に信仰・活動をした	-.07	.08	-.14	-.07	.25	.82	4.03
組織が著名人に認められている、全世界で活躍していると聞き、凄いところだと思った	.24	-.19	.13	-.08	-.08	.74	3.89
組織のメンバーは外部の人々より優れた存在であるとされていた	.02	.10	.16	.14	-.05	.41	4.24

木村（2017a） -3

●MC技術のBSに対する影響：重回帰分析

従属変数：BSの形成・変容

	β	t	
疑問・批判抑制	.33	3.43	**
卓越性	.30	3.10	**
Adj. R ²	.27	***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

従属変数：BSの維持・強化

	β	t	
疑問・批判抑制	.43	6.41	***
自己犠牲	.35	5.19	***
卓越性	.20	2.86	**
対人魅力	.16	2.67	**
Adj. R ²	.65	***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

※「欺瞞的行為」は多重共線性の疑いで除外

木村（2017a） -4

●西田（2008）との対応

西田（2008）の6手順

良好な対人関係の構築

不安や恐怖を煽る

教義で解決し魅力を感じさせる

教義の卓越性を示す

教義の実践により確信させる

退路を断つ

本研究でのM C技術の因子

対人魅力

欺瞞的行為

賞と罰

疑問・
批判抑制

卓越性

自己犠牲

個人要因

●破壊的カルト入信をめぐる議論

宗教的回心の“受動性”

- MC、社会心理学的影響力による操作
(西田, 1995; Singer, 1995)

宗教的回心の“能動性”

- 回心者は自発的な探求者
(Barker, 1984; Balch & Taylor, 1976)
- カルトへの帰属によって
well-beingが高まる
(Galanter, 1990)

受動か能動かは個人・状況によっても異なり、
二者択一の議論ではない (Rambo, 1993)

MCの影響を受けやすい、カルトに魅かれやすい要因？

渡邊・木村・西田（2016）

● MCに対する脆弱性尺度（渡邊・木村・西田, 2016）

－ 6 因子、41項目

- | | |
|------------|---------------------------|
| ①曖昧さに対する耐性 | ... 5 項目、 $\alpha = .85$ |
| ②カリスマ待望性 | ... 7 項目、 $\alpha = .84$ |
| ③自己愛 | ... 8 項目、 $\alpha = .877$ |
| ④承諾誘導への脆弱性 | ... 8 項目、 $\alpha = .792$ |
| ⑤オカルト嗜好性 | ... 9 項目、 $\alpha = .897$ |
| ⑥MCやカルトの知識 | ... 4 項目、 $\alpha = .801$ |

＜資料＞ MCに対する脆弱性尺度 項目（抜粋）

項目内容

＜オカルト嗜好性＞

超能力はあると思う

占いは当たると思う

＜自己愛＞

周りの人から称賛されたいと思うことが多い

誰からも馬鹿にされたくない

＜承諾誘導に対する脆弱性＞

周囲で評判がいい内容なら半信半疑でも従うことがある

著名な人や学者のいうことは間違いがないと思う

＜カリスマ待望性＞

卓越した才能を持つ社長の下で働きたい

すべての不安を取り去ってくれるような人を求めている

＜曖昧さに対する耐性＞

今何をすべきなのかがはっきりしないといらいらする

相手がどうしてほしいのかが全く浮かばないと焦る

＜カルト・MCの知識＞

カルトはどのような特徴を持った集団かを知っている

カルトに入るとどのようなことに従事させられるかを知っている

木村（2017b） -1

●木村（2017b）

集団との接触時における心理的状況、およびパーソナリティや知識（MCに対する脆弱性）について、以下のことを検討した

- ①議論ある団体入会者と非入会者の相違
- ②BSの形成・変容、強化・維持への影響

対象者

議論ある 8 団体	114名	宗教歴なし群	105名
議論のないキリスト教団体	65名		

設問（②以外は面接調査に基づき作成）

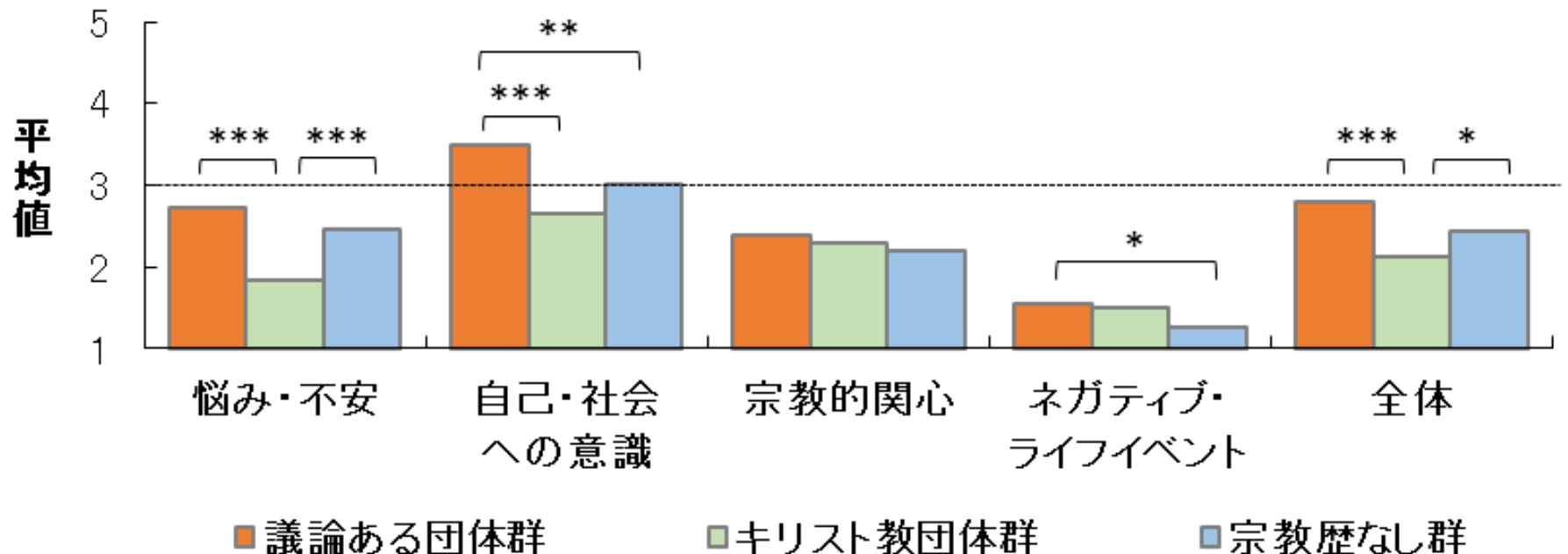
- ①接触時の心理的状況、②MC脆弱性尺度、③BSの形成・変容、④BSの維持・強化

木村（2017b） -2

- 心理的状況については、議論ある団体群では「自己・社会への意識」の高さが特徴的
- それ以外では、議論ある団体群が顕著に高い因子はない

※宗教歴なし群の年齢の偏り（全員大学生）

議論ある団体群【接触時】の年齢：54.4%が大学生（18～22歳）

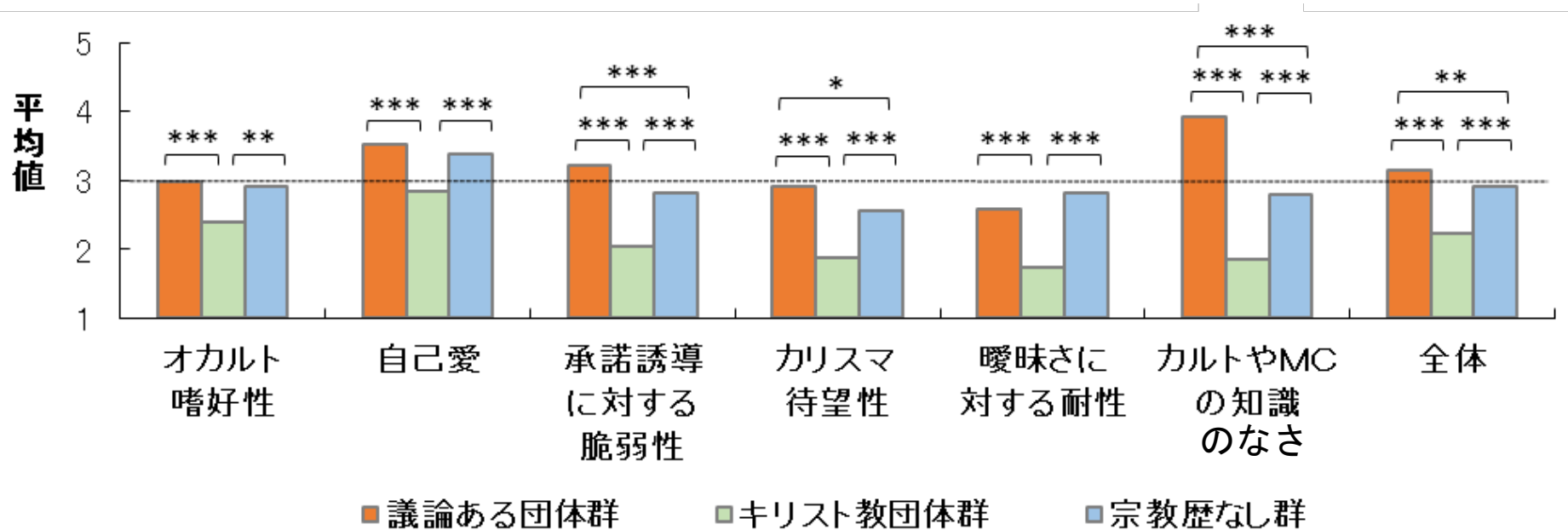


<資料> 接触時の心理的状态 因子分析結果

項目内容	1	2	3	4
<悩み・不安>				
友人や恋人などとの人間関係について悩んでいた	.84	-.11	-.04	-.02
家族関係について悩んでいた	.63	.05	.17	.11
仕事について悩んでいた	.58	.03	-.08	-.07
ネガティブな出来事があり、精神的に不安定になっていた	.53	.10	.10	.10
自分の心の居場所となるようなものがないと思っていた	.45	.22	.17	.04
<自分・社会への意識>				
人生の意味や目的を知りたいと思っていた	-.20	.80	.18	.07
自分や社会はこのままで良いのだろうかという漠然とした不安があった	.03	.76	.14	-.12
社会の役に立つことがしたいと思っていた	.08	.73	-.22	-.02
社会に対して不満があった	.14	.47	-.15	.08
自分を変えたい、成長したいという思いがあった	.40	.47	-.11	-.11
<宗教的関心>				
死や死後の世界とはどういうものか知りたいと思っていた	-.09	-.06	.97	-.06
超常現象などの神秘的な体験をしてみたいと思っていた	.19	-.13	.56	-.02
宗教に興味があった	-.07	.21	.39	.10
<ネガティブ・ライフイベント>				
子育てについて悩んでいた	-.07	.01	-.04	.89
身近な人が亡くなった	.08	-.05	.00	.53

木村（2017b） -3

- 議論ある団体群が他 2 団体より有意に高いのは「**承諾誘導**」「**カリスマ**」「**知識のなさ**」、**全体平均**
- それ以外は議論ある団体群と宗教歴なし群で差はない
- キリスト教群がおおむね低得点



木村（2017b） -4

● 接触時の心理的状況・MC脆弱性のBSに対する 影響：重回帰分析

従属変数：BSの形成・変容

	β	t	
自己・社会への意識	.35	3.62	***
オカルト嗜好性	.30	2.74	**
宗教的関心	-.22	-2.00	*
Adj. R ²	.15	***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

従属変数：BSの維持・強化

	β	t	
自己愛	.45	5.03	***
宗教的関心	-.23	-2.54	**
Adj. R ²	.23	***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

青字：心理的状況 赤字：MC脆弱性

今後の展開

●脱会プロセス

- －カルト問題を扱う現場では最も求められている

●2世問題

- －破壊的カルトの多くは、近年2世が大幅に増加

●テロリズムとの関連

- －テロ集団構成員のリクルート方法、逸脱行為の実行に導くプロセス、コミットメントの強化などへの援用可能性